南太平洋、ツバル 伝統スポーツと近代スポーツのはざまで

石原 豊二

●のどかなオセアニア・スポーツシーン

この冬に開催されたサッカーのAFCアジアカップは、オーストラリアの優勝で幕を閉じた。このオセアニアの大国は、代表チーム強化を理由に、二〇〇六年からアジアサッカー連盟に属している。その結果、この国が抜けたオセアニアサッカー連盟は、すっかり世界のサッカー界から取り残されてしまっている。現在、ワールドカップ出場枠は〇・五。大陸予選の後に行われるプレーオフでは、毎回必ずといっていいほど他大陸の強豪国に出場権を奪われてしまう。毎年末に行われるクラブワールドカップでも、他にライバルとなる国もないため、必ずといっていいくらい出場するニュージーランドのアマチュアクラブは、トーナメントの初戦に組まれる開催国枠で出場した地元プロクラブとの試合に敗れるのが恒例になっている。このことに象徴されるように、オセアニアは、グローバル化と商業化の進む昨今のスポーツシーンから取り残されている感がある。

これまで私はこの地域の国々を何度も訪ね、その度、南の島々のスポーツシーンを目にしてきたが、その姿は、「のどか」のひとことに集約される。赤道直下のキリバスでは、輪切りにしたドラム缶にコンクリートを流し込んで作ったバーベルを、いとも簡単に持ち上げる女性ウェイトリフターの姿に驚かされた。太平洋の島々に住まう人々の太い腕に秘められたパワーが、我々日本人とは全く比べ物にならないことは、その後年、トンガやフィジーで町を歩いている際、ふらりと立ち寄ったジムでも思い知らされた。彼らが笑いながら軽々と持ち上げるおもりは、私が力いっぱい持ち上げようとしてもびくともしなかった。

そういう彼らのパワーが活かされるスポーツの定番が、ラグビーに代表されるフットボールである。この地域の競技場のほとんどには、その両端に高々とゴールがそびえたっている。これに加え、サッカーゴールがそのそばに置かれていることも多く、また、深緑のフィールドの真ん中に芝が刈り取られた砂場があったりする。これはクリケットで投手と打者が対戦するピッチである。

スポーツ社会学の大家、アレン・グットマンは、人類の身体文化を伝統スポーツと近代スポーツに大別した。そしてジョセフ・マグワイアは、規格化された近代スポーツは、産業化の波に乗り、はじめ「帝国」の文化事象としてイギリスから世界各地に広がり、ついで商業主義と結びついたアメリカ発のそれが世界中に普及していったとする。彼らの論をもとに、オセアニア、とくに太平洋諸島のスポーツを俯瞰すれば、大英帝国発のフットボールやクリケットは普及したものの、その後、マーケットとしての魅力の乏しさからアメリカンスポーツはついにやってこなかったと考えることもできる。バレーボールやバスケットは現地でもプレーされるが、やはりその人気はフットボール、クリケットにはかなわない。

●太平洋のど真ん中、ツバル

ツバル、といえば、地球温暖化による海水面の上昇により消滅が危惧されている島国である。南太平洋にあるこの島嶼国へは、地域の「大国」、フィジーからの週二便の小型機しか足がない。この地理的な条件は、この国をある意味現代文明から隔絶させており、首都フナフチでもいまだ人々は伝統の色濃く残った生活を営んでいる。

もちろん、この国にも携帯電話やインターネットなどのインフラは整っている。それでも、まともなスポーツ施設といえば、首都のあるフナフチ環礁の空港ターミナル横にある草が生い茂る「国立競技場」（写真1）くらいしかない

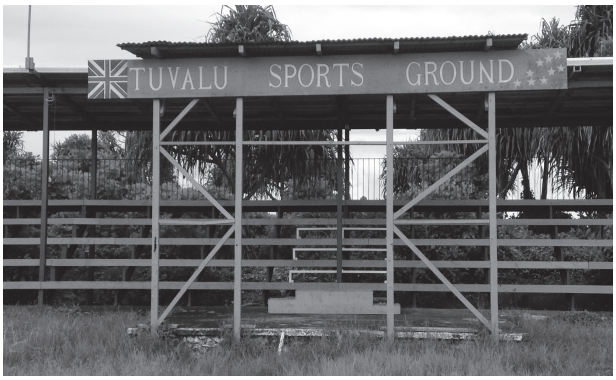

写真１　フナフチ環礁にあるこの国一番のスポーツ施設

写真２　夕暮れ時のフナフチ空港の滑走路

という環境は、この国を商業化したスポーツの影響から隔絶させている。

週二回しか使われることのない滑走路とその周辺の平らな野原は、夕暮れ時になると、島民のかっこうの遊び場になる（写真2）。どこから持ち込んだのか、ゴムタイヤを土台にしたポールに、バレーボールのネットが張られ、視線を移せば、ラグビー、サッカーのボールを男たちが追い回しているのを目にすることができる。定期的に草刈りが行われ、小さなスタンドまで付いている競技場の方は、デコボコだらけのフィールドが嫌われてか、見向きもされない。週二回ほど行われるサッカーの「ナショナルリーグ」までが、舗装された滑走路の延長上にある原っぱに白線を引いて行われている。

夜は夜で、滑走路そばにある照明付きのバスケットコートに若者が集まる。

みたところ、この国で人気を二分しているのは、サッカーとバレーボールだ。サッカーのリーグ戦は、出身島別の八つのチームが参加している。現在のところ、この国最大の懸案事項は、離島から主島フナフチへの人口の集中なのだが、その結果として、この島では、コミュニティは出身島別に形成され、「ナショナルリーグ」も離島間を移動することなく首都で実施できるのである。

この滑走路周辺では、週末になると、槍投げや円盤投げ、走り幅跳びなどの競技測定会やクリケットも行われている。いまだユニオンジャックを国旗に描いているように、この国は、旧宗主国であったイギリスの文化的影響が強いようだ。その一方で、冠婚葬祭や国賓の来訪時には、島ごとの伝統ダンスが披露されるなど、いまだ伝統芸能が人々の生活と密接に関わってもいる。

●ツバルのスポーツにみるグローバル化の諸相

グローバル化を語る時に忘れてはならないことは、グローバル化とは決して均質化だけを指すものではないということである。他文化との邂逅が触媒となって、ローカル、あるいはエスニックな意識が刺激され再活性化することもある。そのような「グローカル」な意識は、スポーツの場においては、しばしば受容した競技を自己流に解釈したり、あるいはローカルな競技に作り替えたりすることで表象化される。

ここツバルでは、クリケット競技にそのことが現れていた（写真3）。この地のクリケットは、本場イギリス領のそれとは少々ルールが異なっていた。通常、打者は、打撃後、打ったボールがウィケット（投手と打者の対戦が行われるピッチの両端にある三本の杭。野球でいうベースに当たる）に戻ってくるまでに、二つのクリース（ウィケットの前に引いてある線。ここに打者が到達するとポイント

写真３　ツバル・クリケットの様子

写真４　フィールドの端で竿を往復させる人

になる）の間を走って往復を繰り返し、得点を稼ぐのだが、ツバル・クリケットの場合、打撃後は、二人の打者（クリケットの場合、打者＝バッツマンは両方のウィケット上にいる）が走る代わりに、フィールドの端にいる二人の男が、長い竿を半円状に往復させることにより、得点をカウントする（写真４）。また、どんなボールでも基本的に打ち返さなければならないこの競技では、ボウラー（投手）は、打者が打ち返しにくいよう、ボールをバッツマンの手前でワンバウンドさせるのが多いのだが、ここではむしろ、ボールをバウンドさせず、打者が打ちやすいような球を投げることが多い。

また、独特のボールゲームもある。彼らが「トラディショナル・ゲーム」というその競技の名は、アノ、またはアヌという。地元民の話では、主島フナフチの北西四六〇キロにある離島、ナヌマンガ発祥の競技らしい。その昔、島の王の崩御の際に、その王の頭部を民衆がボール代わりにして海に向かってトスしあい、海水で清め、再びそれを浜から海へトスで運ぶという儀式が行われていたことに由来するという。にわかには信じがたい話だが、「死」というものに対する捉え方が現在とは大きく違った時代には、そういうことが行われていたとしても不思議ではないかもしれない。伝統スポーツが近代スポーツに変容する際、その暴力性が軽減されることは、すでに多くの研究者が指摘していることだが、この古い儀式が由来だというこの「トラディショナル・ゲーム」もまた、西洋文明との接触により暴力性を取り除かれているようである。

競技は二つのボールを使って行われる。なかに何が入っているのかはわからないが、ヤシの葉を編んでできたボールはかなり重い（写真５）。大きさは、ハンドボールよりひと回り小さいくらい。なるほど人の頭ほどの大きさである。一チームの人数は厳密には決まっていないようだが五〇人ほどだった。チームはコミュニティ別に編成されているようだ。この島のコミュニティは国内の離島別に形成されているので、サッカーと同じく島対抗戦ということになる。競技者には、女性も数名混じっていたが、女性の多くは、フィールド外のテントの下などで観戦にまわっていた。

両チーム六列ほどに隊列を組んで一〇メートル程離れて陣取る。各々の隊列の前には、両軍のから二人が縦列して陣取る。彼らがこのゲームの主役であることは、その屈強な体つきからもうかがえる（写真６）。

両チームひとつずつボールが与えられ、縦列した二人のうち、相手チームへ向かって前の男（アタッカーとしておこう）が、その後ろの男（レシーバー）にパスすることによってゲームが開始される。レシーバーからパスし直されたボールを、アタッカーは、ちょうどバレーボールのサーブの要領で、相手チームへ投げ込む。

このボールが、六列に並んだ相手陣形の外へ行けばアウト、なかに入れば、相手はバレーボールのトスの要領で、前方へ回していくことになる。ボールが、受け手チームのレシーバーまで帰れば、攻撃側のアウトとなり、この場合は、受け手チームにポイントが与えられる。陣形のなかに入ったボールをうまく戻すことができない場合は、攻撃側のポイントとな

写真５　アヌで使用されるボール

り、両軍から放たれた二つのボールが共にアウトになったところでワンユニットが終わる。有効なボールがなくなれば、次のユニットに移り、これが何度か繰り返されて、一ゲーム終了となる。

みたところ、ボールを二つ使う以外は、バレーボールに類似した競技である。この類似が、偶然のものであるのか、この競技が、地元民のいう古来の儀式と、近代スポーツとしてのバレーボールの融合の結果生まれたものであるかについては、私にはわからない。

写真６　アヌの陣形

一ゲームが終わると、いったん休憩となる。この間に、両軍の代表者数名が順番に演説を行う。言葉が理解できないので、内容は不明だが、相手チームを揶揄する内容であることは、しぐさなどからうかがうことができる。また、その内容はユーモアにあふれているようで、頻繁に笑い声が聞こえる。

ゲームには、競技者と同じくらいの数の観客が集まり、休憩中には、競技者の一族が、着色料のついた砂糖水（地元民はこれを「ジュース」と呼んでいる）をバイクで運んできて皆に振る舞っている。

三〇分ほどの休憩が終わると、攻守の場所を入れ替え、二ゲーム目に入る。計何ゲームするのかはわからないが、三時間ほどしているようだ。

このゲームを私は、金曜の夕方と土曜にみたが、土曜は午前中にクリケット、午後にこのゲームが行われ、すべてのプログラムが終わった後は、負けた方に罰ゲームが課されていた。勝った方が、敗軍のなかから何人かを、両軍が相まみえ座っている間に順次引きずり出し、匍匐前進させたり、男性にシャツを脱がせ、それを胸に巻いて「女装」させた上でダンスをさせられるなどの「罰ゲーム」のあと、木の棒でお尻を数回叩かれる。「罰ゲーム」のなかには、「馬」を作らされた三人の男の上に、勝った方のメンバーの柄の大きな女性が乗っかるというのもあった。いずれにしても罰ゲームの際には、場内から大きな笑い声がおこる。

とにかくツバル人はよく笑う。彼らにとって、この競技の勝敗は問題ではない。週末を笑って過ごすツールとしてこれらのゲームは存在するのだ。

●南洋の孤島に残る近代スポーツの原点

ツバル人たちの大きな体をみると、商業化したスポーツの世界にどっぷりと浸かった私などは、ついつい、彼らのパワーを相撲やラグビーに活かしたらビッグマネーが転がり込んでくるのでは、などと思ってしまう。スポーツがすっかり商業主義に浸りきった現在、その技能は富へのツールと化している。そのため、アスリートの越境は年々その数を増している。ある意味それは近代スポーツの行きついた先の姿なのだろうが、人類が、労働と余暇の明確な区別を行うようになった近代を迎えた時に、余暇を楽しむ手段として生み出したスポーツが、「労働」へと変質してしまった今、グローバル化する近代社会から隔絶されたこの南太平洋の孤島に、「余暇」としてのスポーツの原点が残されていることに、私はある種のアイロニーを感じてしまう。

この島嶼国家は、この三月にバヌアツを襲った巨大サイクロンの被害を受けたという。ツバルの人々の無事を祈るとともに、あののどかなスポーツシーンが、今後も続いていくことを心から願う。

（いしはら　とよかず／アフリカ学会会員）

＊記事中に掲載の写真は、すべて筆者撮影